



阿波濃鳴門二

^ 13
2889
2





阿波之鳴 二之卷

柳亭種彦子著
友人玉丞癡夫校

弓子水無瀬橋の宮小花友見

好夏變ては災歎とある事

さても、弓子其後持人の音信なきに、お月ひつづらひ、
系以生半まれの老母みさせ、清明あるみせり、
次郎九郎と家子とめ、孫子とて、且小長柄を、
大抵揚の宮小のりけり、弓子、
母あませまると、預言して、
佩刀と拔き、
見の

阿波之鳴

のさび爛熳らんまんと花の梢さかへ淀川よどがわの波なみの
掉おとしさし推夫おし樹下じゆげ下しも母はは嘯せうへ雲くもみしり
亭ていは憇せうて幽艶ゆうえん及賞じやう。眺望てうぼう教けう訓くんみおまじ。日ひまを
風かぜみ諷ふうひ。斑々はんはんとそかのつらさの
人ひととあすありあまど茶房ちやばう小四十せうしじゆ有あ余まの男おとここれこも花はな及ある
沐みわくこるり。子こ及あ熟じゆく着きて。ままどまとと暴あれししととままここてていいららん
御老母ごらうぼこれこある娘むすめ子この布ぬい運はりり侍さむらいふふややとと向むかみみるるせせううららあ
みてみて涙なみだしてしてゆるゆるとと答こたけけれればば。彼男かのむね落お涙なみだしてしてよよふふわわくくふふここるる
者ものもあるあるののううもも我わが女子むすめ今いま年とし十じゆ七しち及あ一いつ期きととしてしてくくここののままのの

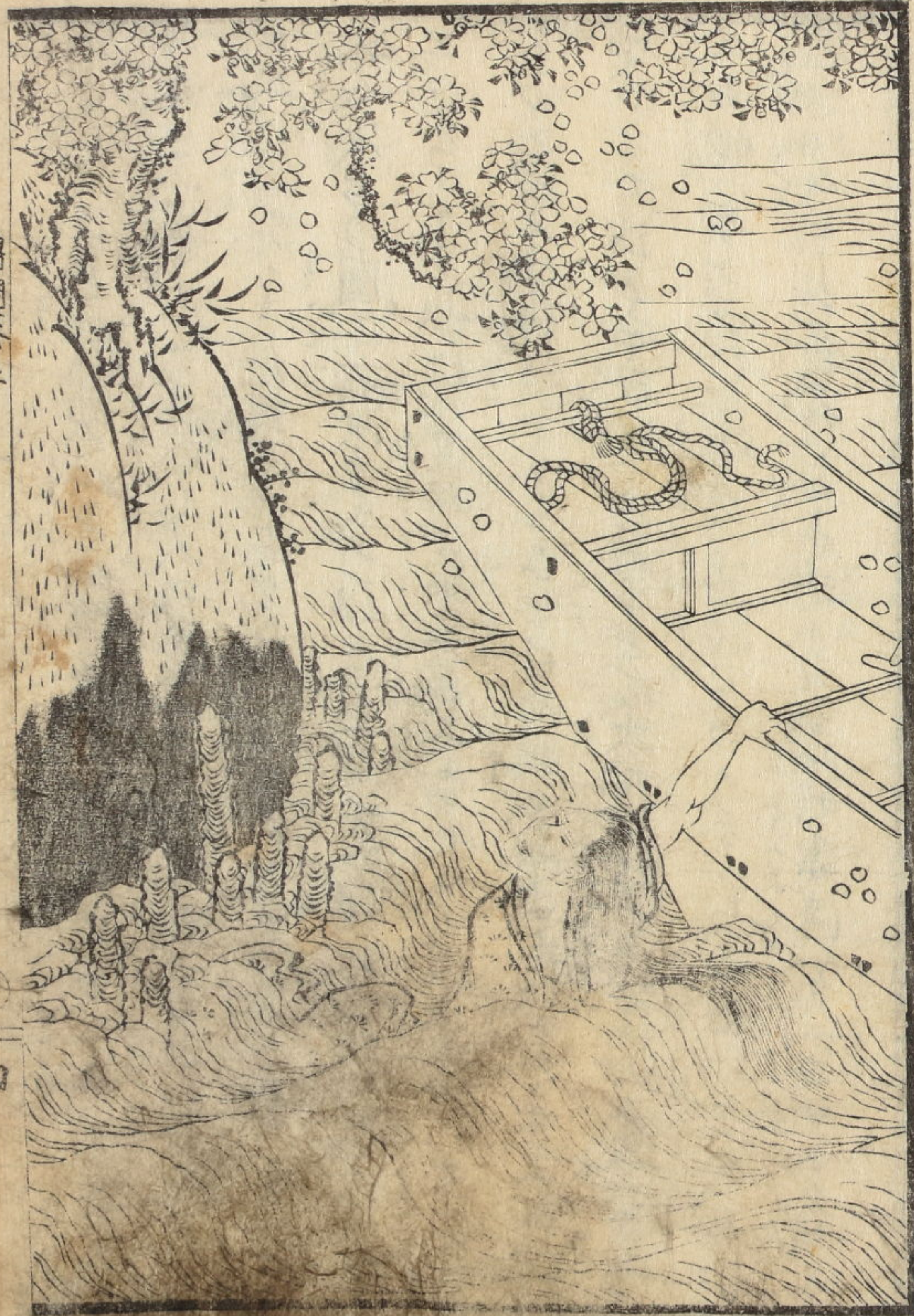
昭和九 七月三日 昭和三十九年七月三日

たぐうせーが此處このところ女子むすめつゆたかたかかかすすげげしくしくいい亡な魂またまのの又またもも陽ひ世よこ
ららわわれれささししるるううとと。いと怪あやたたわわとと侍さむらいるとといいひひらられればばみみささせせららん
もも不ふスス。小こ井いのの悲かなしくしくよよのの哀あはれれ袖そで及あねねはは。ままれれくくへへ長なが柄えいはは里さと
小こままぬぬ者ものももてて侍さむらいふふががああららずず訪まひひひひままああととここああがが昔むかしををままりり相あ
識しののどどくく。互たがひみみ語かたごりりああししるるあありり。芳よし壯さむらい武ぶ士しととああららししるる二ふた三さん個このの
醉あざむ真ま入い酒さけ餅もちのの底そこ及あここねね月つきももううつつふふ本もとああららししるる小こ新あたら張はせせららん
ああららかかててのの山やま吹ふとと今いま換かりりここひひ。肉にく笛ふエ及あ腰こし扇あふぎ及あ拍う子ことと。浪なみのの音ね
炭すす末すえがが目めややにに笠かさああららくくううののぎぎここるる處ところ士し女むすめののああららししるる方かたのの就つ
ととららささままふふうう。吉きち戦せんつつののりり。遂ついにみみ佩ひ刀たがとと技わざををままくく。其その見みのの野の果は

鳥羽巻二

東西へ逃去り。南北へ走り。其踪動大う。あふび。弓子も同章まど
ひて逃人とまれど。みるせの老し。うへは足さく。勞れは。おれし。か
ま。舟走り。ぐく。ちとく。危かり。る。彼男精悍。みさ。を。必。お
弓子が。舟。と。り。やうく。淀川の堤。小。い。り。渚。舟。つ。あ。だ。あ。い。こ
舟。指。さ。の。舟。こと。我。より。さ。り。し。あり。長柄。して。使。舟。や
や。ん。とい。か。舟。二人。いと。鉄。んで。あ。り。つ。る。彼。男。も。つ。い。と。と。び。の。り
纜。繩。を。と。く。と。み。へ。が。水。を。濁。が。符。首。め。い。つ。ん。で。い。く。と。と。び。と
投。ご。し。り。あ。る。や。と。叫。び。弓。子。を。と。り。て。あ。ら。く。舟。と。木。を。と
あ。一。船。押。ら。み。と。仕。合。し。と。ち。ら。舟。つ。ぶ。や。と。行。か。も。あ。ら。び。漕。で

ゆ。憐。べ。みる。せ。の。声。こ。こ。得。む。浮。つ。沈。つ。ま。が。れ。が。あ。り。よ。く
水。舟。み。ど。り。つ。た。し。を。側。の。舟。長。あ。い。れ。と。械。を。あ。げ。け。い。さ。の。け
つ。水。小。瀬。れ。由。縁。女。と。人。意。あ。め。り。し。が。行。時。あ。り。て。漸。く。は。返。ひ
ら。た。縁。故。を。語。れ。ば。一。人。の。船。頭。の。い。ら。く。と。れ。こ。と。日。頃。風。説。の。い。の。れ
小。濱。の。治。郎。と。い。か。盜。賊。多。く。黨。と。い。ひ。く。秀。麗。女。兒。と。匂。引。し
今日。様。の。宮。の。躁。動。も。れ。ら。が。謀。討。あ。ら。と。と。さ。く。より。水。を。流
鞭。然。し。と。し。や。於。弓。の。ゆ。ず。す。も。花。や。み。ま。て。敵。ら。を。人。を。諷。ひ
あ。の。様。え。枝。な。く。こ。お。か。け。扇。と。ひ。い。て。路。の。く。人。を。さ。し。ま
縁。さ。や。弓。子。老。婆。と。ま。て。い。づ。く。ゆ。と。叫。び。時。つ。ま。と。ま。ま



小舟の
 波に
 揺られ
 舟に
 乗る

あつこと母の乳心一まひ一也。そのあつことよりあつこと
泣伏て更にお正体ありけり。よ次有る礮火をまきまきぐりつ。をど。
吐息してきく。娘弓子も失一の宿世よりさびさびし因果と
ありひあつことめんが。身体ま小窮る難儀あり其縁故とりのい
我湯治場よてお此くの夏ありと軍太よ田會。弓子を送こと
急約せ一五二十夜物語ればあつこと。さうあつこと。涙のひま
あつこと弓子家よゆをたのめれも致び埋木の夫婦ま世よりの
ることあつことと声よつこと。よ次有るつ細よめて口あつこと
然あつこと宣あれど。ガークの老母の耳よ。と夫婦ま小を

吞啼泣刻とらつこと。彼老母も安眠とせん。間おして
明障子の。ゆへとらつことめく。二人とあつこと。ゆへとらつこと引あつこと
れい水無瀬懐剣やて胸をさつこと。貫を。朱小漆と伏わたり。
夢現のつこととあつこと。遠周章ひとあつこと。声のめれ入ま度とあ
手中に口小唾もや息も絶とつこと。歎のつこと。側よ。夢現の
その散あつこと。小あつこと。信あつこと。果して障子よ
書おたあり。急を燈とちうらひとつこと。とつこと。
老つこと。春の小児小ひと。つこと。物見つこと。機つこと
花子春日とつこと。あつこと。や。盜賊のつこと。とつこと。

肩輿長刀をさしたる。従者數多あり。長柄村にてもむとらん
又と此右邊の老母みませの亡骸を行轎中のらの子を奪はれ
分説として。畠山の館に急ぎ。千二の渡りて。軍太は行合たり。
互の挨拶あり。ちゆきあひひりて。弱息のめり事
ついで。一席もき。物詰りあり。己がしとせ。竹轎とせし
中ゆき。先此内へ入む。軍太討まぐ。こと。とあり。ひ
らねる。大小驚き。客此知ま。出む。あひ。處子をあひ
あひ。やとあひ。侍り。束物の裡あり。是老女の亡骸あり。
必定あり。由縁あり。い。やと向ふ。次右の派と。い。

あひのしりやと。搦の宮の花え。首と。水無瀬が自害あり
つる尾を。つ。の。懐中より百両の金と。い。せ。よ。彼
軍方との者。生得好侍。貪欲深。悪姓の。あ。此金と
みる。不手悪意を。刀を。技と。次右。門。切て。か。あ。
ひ。け。い。の。れ。眉尖。切ら。れ。此。奴。何。也。我。害。せ。ん。と
い。す。と。い。ん。す。起。あ。がり。て。技。あ。い。す。れ。と。切。度。の。手。腕。に。劍。法
や。み。い。れ。あ。む。足。を。い。ま。い。ま。い。を。軍。太。得。り。と。声。を。け
ま。弓。子。を。引。引。これ。い。ん。と。亡。説。女。の。入。れ。と。門。を。分。説
と。り。と。利。非。も。い。と。す。遂。よ。と。次。右。の。を。切。殺。し。弓。子。を



あつて君の命のしく小子長柄の里よりの如彼處女子家一の
す其子細を伺ひて湯治よあむむと一箇もして病死せし
やせどみよめりあつて空言よて彼子よしく小女院よ賣つしせ
と我を欺る。君より糸女よまやりし百兩の小金よ。彼よ
れは是も我諺りありとのりの分説と。与政右の討捨り
と實しく語れば多門もより驚うせむひがやありてはがやと
る理よ似これども既より子と夫婦の契約をせしるの彼の夜の
外父あり。とくと利非もてさす。殺害をせしこと。疎忽されど不貞の
体よんくひら。理ある哉今宵紅国小折花せんず情人と失ひその



夜の寐もやりたきて。一人孤燈小むのりて無常と観と。遠よ
矢の道に廢し。桑門ともありあん心なれど。兄國清側り
れば其心願ごよとげのこく。あどあく。病よのこて本國阿波の
徳鳴つど。ごられけ。

浅茅盲女とありて貧家よ苦む
次郎九郎孝心之事

めて浅茅冷九郎は泣を家よ飯り。彼典昇よ縁故と向て。と
殺害せし島山多門が家子よ。由い志れし。の思わさる。と九郎
力けく。仇討のこととあんと思ひもよ。はさる。と

被^{さく}子^{あめい}忍^にび。細^こ賞^{しょう}よあ。草^{くさ}とひねれど目^めういのつらぬことあれば。
 日^ひとつと月^{つき}とあつねむ。百^{ひゃく}段^{だん}の池^{いけ}とひるころころ。家^{うち}内^{うち}に^いま^まと^ところの
 雜^ざさまで悉^{しつ}く煙^けのちろろ。賣^うばして。塵^{ちり}をくりの物^{もの}に^らめ^めず。家^{うち}に
 荒^あゆくす。壁^かは^は羅^ら葛^{くわ}とひのり。小^せ釜^{かま}の床^{とこ}を貫^{つら}て。筆^{ふで}夏^{なつ}のう
 露^{つゆ}落^おちく。八^{はち}重^{じゆう}葎^{らふ}の^{らふ}門^{かど}を^を野^の花^{はな}色^{いろ}とあんとあてあけけ。首^{くび}ま
 秋^{あき}とともあつねむ。いも。さの^さと^とす。今日^{けふ}とくまて冬^{ふゆ}のさ
 ち。さ^さと^とあつねむ。いも。さの^さと^とす。今日^{けふ}とくまて冬^{ふゆ}のさ
 けれど。此^{こゝ}日^ひの猿^{さる}人もまねふ。と。只^{ただ}一^{ひと}洗^{せん}の^{せん}後^{あと}もあらず。母^{はは}の好^{この}む酒^{さけ}は

且^{かつ}買^か得^える^るとあつねむ。いも。さの^さと^とす。今日^{けふ}とくまて冬^{ふゆ}のさ
 ち。さ^さと^とあつねむ。いも。さの^さと^とす。今日^{けふ}とくまて冬^{ふゆ}のさ
 けれど。此^{こゝ}日^ひの猿^{さる}人もまねふ。と。只^{ただ}一^{ひと}洗^{せん}の^{せん}後^{あと}もあらず。母^{はは}の好^{この}む酒^{さけ}は

火爐の側はあられいど暑てらちしと。おしとむれど。あしつ更しは
らび。今寒風は肌を冷せば。又くる春はいつためて病を發するものど。
何方ありくと。問はむば。冷く九郎の哭りて。やうくもせむり。
今日の街道よし然るに。旅人も通りあふせず。只一錢の銭も得ざらば。
すべあさやう我著るる衣を賣。酒と米とよめくれば。此解衣より外
は著物は。とさくより。浅草の涙はこれ。正体さくらの愚さればとて。
はが著るる衣。酒食の料に賣。事世にあぶることもあがらば。
我子の衣。よえいとさけの憂を拂ふ玉。掃も猛火とさめる。餘患道
の水よのどのさちして。彼熱鐵の丸。吞とつて。一魔道の苦

辛もそれよやいのど。勝べしと。手は持茶盃を置もやらず。身とふるす。手
れば。酒のあがれて膝よのど。次郎九郎手布とてぬぐひて。母上は歎
あひて。世の害とあらん。いのちを宿世の因縁とて。貧苦と迫り幸
行心の半も。あしつと。と声をこらりよ。泣叫ぶ浅草やうく。鼻うち
のふく。と寒うとんこれ暑うとて。己が著るる衣とぬぐ。次郎九郎よ
あしつ。次郎九郎大は敬馬さ。年老あは御さあれば。まが母さま
らとめしと。我子よよむらあふ。あしつと。とさむらう。いふよ。
次郎九郎のこころ。とむらあふ。孝心とさむらう。其辨はらる。
とあがる。いと我其衣とさむらと。ひとさすれば。冷く九郎うら

ありてあふしはあはれとぞ。そむさやべと會ととりて寐をえて
 うと声して泣んとせしが。綴の袖とよほ泣いて涙をくく。あはれ
 身もれて涙さ衣こす今あらんあはれ。彼はあはれとて喜か
 んよわくまぐ。尾葉をうらめしく。日頃心信しとてまつ。觀世音の
 御誓ひよ。枯くる木も花咲く空言よとありけるよと。御佛こ
 眼みこして泣寐入小卧よけり。次郎九郎ととあはれ。彼會と目さ
 めぐるもあはれ。母よとせ。あはれ。今母のてらぐる。觀音の佛刀
 こして。枯木も花咲。春よあはれ。是屈強の事ありとひとり。其
 曉とあはれ。夜毎觀音寺の觀音。まあ。母の眼病平愈は

ニッ。おれ子が命つるべ。賢とつげあはれ。一心不亂。いの
 ち。愚さる。次郎九郎も。實よりあはれ。智ある。てく。み
 えよけり。

上杉



河波之鳴門二之卷 畢



